

# 那智惇斎の学問と思想

濱 久雄

## はじめに

三島中洲門下の俊秀の中、文章を以て令名高い人には松平康国、本城問亭、佐倉達山、著述を以て著名な人には児島星江、池田蘆洲、詩文を能くする人には山田岳陽、山田済斎、細田剣堂、佐藤胆斎らが輩出した。那智惇斎は詩文を能くしたが、特筆すべき著述は見られず、ひたすら中国古典の講義に専念された醇儒というべき方であった。

しかし、山田済斎が昭和十八年五月、喜寿を迎えて二松学舎専門学校長を辞任した後を承けて、第二代学校長として二松学舎の苦難の時代を克服され、晩年には二松学舎大学長として二松の伝統を確固不拔のものとされた。かつ陽明学を標榜する二松学舎の学風を堅持され、まさに中洲門下の後勁としての役割を果たされた。

今回、二松学舎大学東アジア学術総合研究所の陽明学研究部より、『陽明学』第一七号に那智惇斎特集号が企画されたことは、実に時宜を得たものと言わざるを得ない。そして、私に執筆の機会を与えて下さり、誠に光栄の至りである。思えばかつて昭和十八年、私が大東文化学院に入学した時、那智先生に保証人となって戴き、先生と親交を辱うした先考青洲も『惇斎文詩稿』に跋文を書き、那智先生との因縁浅からざるものがあつた。そこで本稿では、那智惇斎先生の出自と学歴、経学思想、および交友関係につき、『惇斎文詩稿』その他の資料を中心に論述したい。

## 一、那智惇斎の出自と学歴

那智惇斎は明治六年（一八七三）七月十日、千葉県香取郡府馬村に生まれた。名は敬典、字は天叙、通称は佐典、ま

たは佐伝。惇斎はその号である。父是那智正敬、母は大榎氏、二男一女を生み、惇斎はその長男である。かつて惇斎は「祖考那智加賀正君行状」と題する長篇を草し、祖父（諱は明敬、加賀正と称す）の行状を明らかにすると共に、那智家の先祖につき詳述している。

那智家は代々神職で、その始祖は神祇伯大中臣清麻呂で、その後裔が紀伊国那智に移住し、熊野大神に事えたので、那智を氏とした。その後、数世にして大中臣宣久に至り、会々大神を下総国府馬の莊、松沢の里に分祀したので、同職らと共に移って大神に事え、那智宮祭祀長となり、子孫が世襲し、兼ねて祠職葬祭の事を掌り、府馬三昧欄宜と称したという。降って祖父は一意、神に事え、常に敬神愛国を旨とし、皇道を振起しようとして嘗て本居宣長・平田篤胤の人と為りを敬慕し、明治十三年十一月に平田神祠に謁し、神霊の弟子となることを誓った。これより篤胤の生前の弟子東正胤と来住して皇学を講明し、寢食を廃するに至ったという。

惇斎は祖父の鞠育の恩を感謝して父母のごとしと述べ、日夕寢寐の間に敬神愛国の訓誡を十分に聞かされ、人格形成に多大の影響を蒙ったことを述懐している。

三島中洲はこの一文に対し、「足下は正実にして勉学倦まず。吾が門屈指の一なり。今その祖考の行状を読み、その庭訓に得たる者多きを知る」と評している。

このほか、一般に知られていないことは、惇斎が天真正伝香取神刀流を飯篠盛貞に就いて習得したことである。その撃剣の教え方は、先ず忠孝の大義を明らかにしてから剣を用い、剣のほかに槍・眉尖刀・拳法・弓馬の術に及び、循々として身を以て弟子を率い、嚴寒酷暑でも未だ嘗て少しも倦まず、数十年一日のごとき有様であったという。「飯篠氏講武堂記」に詳述されている。

学歴は明治十九年、無逸塾に入り、渡辺存軒の教えを受け、明治二十三年四月、二松学舎に入学した。当時は西学が隆盛となり、漢学を専攻する者は数えるほどであった。その頃の二松学舎は柳の古木が茂っていた柳塾のほか、いくつかの舎房があったが、塾生の多くはここに寄宿し、ある者は他の学校に通って別の学問を修めていたという。

本塾の講堂では毎朝二時間、中洲の講義を拝聴し、午後諸教授の授業を受けた。その後、二松学舎は衰運に向かい、中洲の朝講すら、教科の内容によっては受講者は二、三人であった。当時の塾生は経子の学よりも文章を好み、

『唐宋八家文読本』・『文章軌範』等の授業は比較的多数が受講したが、『尚書』・『伝習録』などは寥々たるものであった。そして、ある時は二人で中洲より民法の講義を拝聴したこともあったとい<sup>(3)</sup>う。

明治二十七年三月、卒業して助教となったが、翌年に辞して郷里に帰り、二十三歳の若さで私塾菁菁学舎を創立した。これは近隣故旧の勧めにより、斯文を講習するためであり、中洲より菁菁と命名され、三月六日に開学の式を挙げ、郡長以下百余名が臨席した。この学舎名は『詩経』小雅、菁菁者莪の詩序に、「菁菁は材を育するを樂しむなり。君子能く人材を長育すれば、則ち天下これを喜樂す」とあるのに基づく。

惇斎は「菁菁学舎を開く序」<sup>(4)</sup>の中で、「然らば則ち能くこれを長育せば、その材を成さしむる者なり。蓋し、先生の名を賜ふの意なり。敢て当らずと雖も、然もその材を成す者は、また唯だ克く忠、克く孝の材を成すのみ。則ち心誠にこれを求め、倦まず厭はず、しかる後に或ひは得て企及すべきか」と述べている。この学舎の建学の精神は「克く忠、克く孝、以て国体固有の美を明らかにする」に在った。時まさに日清戦争に勝利を収め、三月二十日に下関で

講和会議が開かれた。

しかし、惇斎は明治三十四年三月、わずか六年間で菁菁学舎を廃し、再び二松学舎で学ぶために塾し、中学校および諸校に教鞭を執るかたわら、中洲の講義を拝聴し、また詩文の雌黄を乞い、三十五年に塾頭を命ぜられた。時あたかも桐城派の後勁として令名が高かった北京大学堂総教習呉汝綸が日本に來遊した。惇斎は中洲の承認を得て、細田劍堂らと相謀り、富士見町の富士見軒で歓迎会を開いた。会する者は中洲を始め、門下の入江為守子爵、藤井少将ら二十余名で、中洲は歓迎の詩を贈り、佐倉達山が歓迎の序文を呈し、呉汝綸は次韻の詩と答辞を咄嗟の間に草し、会する者を瞠若たらしめた。惇斎は回想している<sup>(5)</sup>。

かつて浦野匡彦学長と初めて面晤した折に、学長室の壁に掲げられた呉汝綸の素晴らしい書を笑顔で指さされ、二松学舎の片隅に放置されていたのを発見して額に納めたと言われたが、これはその折に書かれたものに違いない。

かくして、惇斎は大正十一年まで教授、漢文科主任として活躍し、大正十二年、五十一歳の時、大東文化学院教授（同十五年まで）となり、昭和二年一月、実践女子専門学校講師（同十一年まで）。十二月、駒沢大学講師（同十六年まで）。

昭和三年一月、五十六歳の時、再び大東文化学院教授（同二十三年まで）。二月に二松学舎専門学校教授。十一月、今上陛下の大札に当たり、多年教育に従事したことにより文部大臣より表彰された。昭和八年、六十一歳の時に二松学舎理事。同九年、六十二歳の時、東伏見宮大妃殿下に「支那秦漢唐史」を進講した。同十五年、六十八歳の十月に、教育に関する勅語渙発五十年に当たり、多年教育に従事したことにより、文部大臣より表彰を受けた。昭和十八年、七十一歳の時、推されて二松学舎専門学校第二代の校長となり、兼ねて漢学専修二松学舎長に就任した。それは山田清斎が喜寿を迎えて、郷里の岡山県高梁に帰隠し、十八年間にわたる初代専門学校長の職を辞任したからである。謙虚な惇斎は就任の辞でこう語っている。<sup>(6)</sup>

先生の後を襲ぐべき方は中洲先師御門下先輩、若しくは教授各位、及び御嫡孫三島一君等、その人乏しからざるに何事ぞ理事長殿始め理事諸君の御推薦にあずかり、愚昧浅陋なる某がこの重任を辱うするに至らんとは、学徳なく才能なく、まして閱歴なく頑冥にして機を見るの明なく魯鈍にして時に応ずるの智なきを以て、その器に非る点を述べご辞退せしに再三熟議の結果、これを擬す

ることになりたる故、数十年先師の恩を受け居れば、それに報ずる積りにて承知せよとのことに相成り、ただ師恩を説かれては一言の申し訳も出来兼ね、遂に自ら揣らず傲然憚りも無く、続貂の非難をも顧みずお請け仕ることにしたのであります。

と述べられ、「乏しきを二松譽長に承け、此を賦して自ら誓ふ」と題する次の詩を詠じた。

大哉九秩明斯道 大なる哉 九秩 斯の道を明らかにし

遺弟幾千誰倍道 遺弟 幾千 誰か道に倍かん

七十視師猶壯年 七十 師に視ぶれば 猶ほ壯年

微躬欲殉先師道 微躬 殉ぜんと欲す 先師の道

想えば、私が大東文化学院に入学した時、先考の依頼により保証人となられた先生は、保証人の職業欄にただ「教員」とのみ書かれ、私もいいさか驚かざるを得なかったが、謙虚なお人柄を雄弁に物語るものである。

その後、昭和二十六年、七十歳の四月、二松学舎大学長兼附属高等学校長に就任し、同三十年、八十三歳の十月に学校法人二松学舎理事長、同三十三年、八十六歳の五月、多年教育界に尽した功により藍綬褒章を授与された。同三十五年、七月十日、米寿祝賀記念会から祝賀を受け、『惇

斎文詩稿』が刊行された。その序文の中で次のように述べている。

抑々余の文は迂滯晦渋、鬱轡して暢達せず。詩に至つては、則ち格調合はずして失声多く、鄙俗猥拙、謂はゆる千篇一律、変化を見ざる者、適々以て大方の閔笑を買ふに足る。固より録するに足らざるなり。然れども六十有余年、学舎の教授の席末を辱うするの経歴、此の文詩に由りて以て相証すれば、則ち義理の学、固陋といふと雖も、勉焉として已まざれば、幸ひに先師の道に倍かざるを得ること、亦た以て庶幾ふべきなり。

と述べている。実に先生は数十年にわたつて木鐸を振り、その間に『唐宋八家文読本』・『孟子』・『春秋左氏伝』・『十八史略』・『易経』・『伝習録』などを講じ、音吐朗々とした名講義はすでに定評があつた。

三十七年五月、九十歳にして理事長・学長の職を辞し、学校法人二松学舎顧問・二松学舎大学名誉学長を贈られ、四十年、九十三歳の時、勲三等旭日中綬章を授与された。四十四年四月、二松学舎長に推戴され、教授および二松学舎研修塾長の職は従来通りで、大学の講義は継続されたが、昭和四十四年十一月二十一日、享年九十六歳を以て道山に

帰され、千葉県香取郡山田町府馬の先塋に葬られた。

## 二、惇斎の経学思想

惇斎の経学思想は『惇斎文詩稿』所収の漢文で認められた数篇の論述により知り得る。文章は極めて簡潔であるが、その思想傾向を十分に理解し得る。参考の為に書き下し文として紹介し、必要に応じ解説を加えたい。

### (1) 氣質変化説

氣質は得て変化すべきか。曰く可なり。氣質は得て変化すべからざるか。曰く可なり。氣質に大小あり。小なる者は得て変化すべきなり。大なる者は得て変化すべからざるなり。何をか小氣質と謂ふ。緩急昏明強弱の稟これなり。苟も能く博学審問、慎思明辨、篤行し、しかる後に愚者は以て明に進むべく、柔者は以て強に至るべく、急ぐ者は能く緩かに、緩かなる者は能く急ぐなり。この故に西門豹の性急も韋（なめし皮）を佩びて以て己を緩うし、董安于の質緩も弦（げん）を佩びて以て自ら急にす。これ小氣質の変化すべき者なり。何をか大氣質と謂ふ。その才と不才と、巧と不巧これなり。夫れ学は身を誠にするのみ。天理を存して人欲を制するの謂ひなり。人苟も博学

篤行せば、則ち天理を存するは、蓋し能くすべきなり。天理既に存すれば、則ち人欲は制すべきなり。夫れ唯だ人欲を制し、天理を存して身を誠にするは、則ち聖人のみ。聖人は独りその身を善くするのみならず、兼ねて天下を善くす。しかしてその天下を善くするや、至って善くする者あり。堯舜これのみ。至って善くせざる者あり。湯武これのみ。才と不才とを以てなり。この故に古より聖人甚だ多きも、その才は皆同じからず。蓋し、学問は能く身を誠にするを得るも、その才はこれを如何んともするなきなり。故に曰く、小氣質は変ずべきも、大氣質は変化すべからざるなりと。これを四肢に譬ふれば、長短肥瘠は変化すべからずと雖も、しかもその坐作進退は、則ち学んで以て礼に合すべきなり。兵を以てこれを言へば、その攻守進退号令の法は、皆その同に反してその異を変ずるを得。然れども運用の妙に至っては、則ち一心に存す。猶ほ聖人の道は能く身を誠にするを得るも、事業の大小巧拙は、則ちその人の才に存するがごときなり。孟子曰く、梓匠輪輿は能く人に規矩を与へて、人をして巧たくみならしむること能はずとは、この謂ひなり。然りと雖も、小氣質の変化は勉強の功を積むに非ずんば、則ち能

はず。謂はゆる人一たびこれを能くせば、己これを百たびし、人十たびこれを能くせば、己これを千たびし、然る後に能く変化すべきなり。故に唯だ勉強に在るのみ。宋儒謂ふ、人は皆な氣質を変化すべしと。蓋し、氣質に大小あるを知らざればなり。

つまり、宋儒は誰でも皆な氣質の性を変化させることは可能というが、氣質の性に大小の区別があることを知らぬため、大氣質の性は変化させることが不可能であることに気づかなかったと惇斎は結論づけたわけである。そして、大氣質はその才と不才、その巧と不巧をいうと断じている。さらに人欲を制し、天理を存して身を誠にする人こそ聖人であると規定したうえで、堯舜と湯武のちがいを提起し、才と不才の差異に帰しているの、湯武の氣質は変化させることはできないことになる。これは禪讓を是とし、放伐を非とする判断を基準として才、不才を峻別したのである。かつて山田方谷が「伯夷叔斉を詠ず」と題する七絶の中で、「剪商の計就なつて竟ついに戎衣、宇宙茫茫 誰か非を識らん。君去つて中原 幾周武、春風吹き老ゆ 首陽の薇」と詠じた見解に基づくものであろう。

## (2) 横渠の四為説

学者は志を立てざるべからず。立志は大ならざるべからず。宋の張横渠が四為の言は、立志の大なる者と謂ふべし。四為の言たる何ぞや。曰く、天地の為に心を立て、生民の為に道を立て、去聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く。これなり。天地は生生を以て心と為し、人の心は天地の一分なり。故に万物をして各々おのおのその性命を正さしむ。これ天地の為に心を立てるに非ずや。道は天下の達道なり。故に義理を建明し、綱学を扶植す。これ生民の為に道を立てるに非ずや。古聖賢が道統の伝を續述して、これを當時に行ふ能はざれば、則ちこれを後世に行はんと欲す。この故に王者起る有れば必ず法を取り、利沢は民に及ぶ。これ去聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開くなり。嗚呼、四為の言に愧ぢざる者は、古往今来、孔夫子一人あるのみ。その己に克つて四を絶つといふは、則ち天地の為に心を立てるの謂ひなり。その仁遠からんや。何ぞ斯の道に由る莫きといふは、則ち生民の為に道を立てるの謂ひなり。その堯舜を祖述し、文武を憲章し、人知らずして慍みず、後世その教へを用もつて天下を治むるは、則ち去聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開くの謂ひなり。然れども、天地の為に心を

立つるは、即ち生民の為に道を立てるを得。生民の為に道を立てるは、即ちこれ去聖の為に絶学を継ぐなり。これ万世の為に太平を開くなり。是を以て天地の為に心を立てるは、実にその本なり。孔子は大聖人なり。後世これに及ぶ無し。孔子にして後に天地の為に心を立てるを得。横渠は乃ち孔子に如かざるを以て己の病と為す。故に曰く、志を立てる大なる者と謂ふべしと。この故に横渠は殆ど道に至り、当時の矜式する所と為る。後世の学者、志を立てること大ならず、徒らに小成に安んじ、その身を終ふるまで道を見ること能はず。嘆ずべきかな。<sup>(8)</sup>惇齋が宋の張載（横渠）の四為説を重要視したことは、あながち偶然とは言えない。横渠は周濂溪の太極に基づき大虚説を主張し、王陽明もかつて「良知の虚は便ち是れ天の太虚にして、良知の無は便ち是れ太虚の無形なり」と断じ、大塩中斎も太虚の語を祖述し、「形質ある者は、大と雖も限りあり、而して必ず滅ぶ。形質無き者は、微と雖も涯り無く、而も亦た伝はる。高岳桑田、或ひは崩れ、或ひは海となる。而して唾壺の虚は、即ち太虚の虚にして、唾壺毀ると雖も、その虚は乃ち太虚に帰して万古滅びざるなり」と述べている。<sup>(10)</sup>さらに王陽明の補遺詩の七律に、「別

語、吾が言は訂頑に在り<sup>(1)</sup>」と詠じているのである。この詩は正徳二年（一五〇七）、陽明が獄を出て、謫地の竜場に赴いた時の作であり、「諸門人、送つて竜里に至る、道中三首」と題する第一首目の詩である。訂頑とは横渠が塾の西窓に懸けて学生の誡とした文章で、後に西銘と改称された。以上のように共通した思想的背景もさることながら、惇斎はこの四為の一文に着目し、『論語』子罕篇の「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし」の文言を以て「天地の為に心を立つ」と関係づけ、『論語』述而篇の「子曰く、仁遠からんや。我れ仁を欲すれば、斯に仁至る」の文言と、雍也篇の「子曰く、誰か能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由ること莫きや」の文言を以て「生民の為に道を立つ」と一脈相通ずると判断した。また、『中庸』第十七章の「仲尼は堯舜を祖述し、文武を憲章す」と、『論語』学而篇の「人知らずして慍みず。亦た君子ならずや」、および「後世、その教へを用ひて天下を治む」の文言は、「去聖の為に絶学を継ぎ」、「万世の為に太平を開く」一文と親和性を持つと判断したのである。

(3) 教<sup>おし</sup>ふるは学<sup>まな</sup>ぶの半ばの説

士は聖人に至りて止む。聖人の学は致知格物のみ。致

知とは何ぞや。吾が良知を致す、これなり。格物とは何ぞ。物を正してこれを正に帰す、これなり。夫れ物を正してこれを正に帰す。これ我が良知を致すなり。我が良知を致す。これ聖人なり。聖人は天下万物の天理は知らざるは莫きなり。天下万物の天理、知らざる莫くんば、則ち往くとして矩を踰ゆるなきなり。是の故に未だ物を格<sup>な</sup>さずして、これを致知と謂ふべからず。実行無くして、これを真知と謂ふべからざるなり。昔<sup>むかし</sup>者、孔子は大聖人なり。その門は実行を以て先と為す。是<sup>こゝ</sup>を以て弟子三千、皆な真に聖人の道を知るを以て己の任と為す。夫れ苟も真にこれを知らんと欲せば、則ちこれを実行せざるべからず。これをその師に資り、またこれをその徒に教ふ、豈にその学ぶ所を実行する者にあらずや。何んとなれば、則ちこれをその師に資り、能く我が良知を修め、これをその徒に教へて能く者の不正を正す者なり。物の不正を正して能く我が良知を致す。然らば則ち我が良知を修むる者は、これ吾が学問の半ばなり。物の不正を正す者は、亦たこれ吾が学問の半ばなり。兼ねてこれを合すれば、則ち真にこれを知る。然る後、聖人の学は全し。故に曰く、教<sup>おし</sup>ふるは学<sup>まな</sup>ぶの半ばなりと。方今、文明にして上、



士を取り、尤も実行を重んずるは、蓋し此が為なり。是を以て士は口に六芸の文を吟じ、手に百家の偏を披き、これを実行すること能はず。則ち適々<sup>たまたま</sup>以て書簞の蠹魚と爲るに足るのみ。嗚呼、世の士爲る者は、能く修め、また能く教ふ。夫れ此の如くにして致知格物を能くする者なり。聖人も得て至るべし。然り而して天下国家得て治むべからざる者は、未だこれ有らざるなり。<sup>(12)</sup>

惇齋は冒頭に格物致知に關し、明瞭に王陽明の見解を支持し、「致知とは何ぞ。我が良知を致す。これなり。格物とは何ぞ。物を正してこれを正に帰す、これなり」と断じている。さらに聖人は天下万物の天理をすべて知悉する者と規定し、これを知らねば、心の欲する所に従えども矩を踰えずといった境地に到達できぬとされ、それ故に物を格さずして、これを致知と言うわけにはゆかぬとされる。かつ実行が無ければ、真知とは言えぬとし、陽明の知行合一の重要性を強調する。

このように陽明学の精神を有効に実践する為にも、師に学んだところを弟子に教え、常にその過程において、物の不正を正し、我が良知を致すべきであると説く。これこそ『書経』<sup>えつめい</sup>説命下に見える「敷<sup>お</sup>ふるは学ぶの半ばなり」とい

う名言の通り。人に教えることは、自分の学問を助ける効用となり、自ら学ぶところの半ばに相当するのである。この語は『礼記』学記篇にも引用されているが、このような努力によつて致知格物を能くすれば、聖人の域にも至り、結果的に天下国家を治め得ると結論づけておられる。

#### (4) 周易繫辭作者に就いて

惇齋の学問は特に『春秋左氏伝』に關しては定評があり、二松学舎のほか、大東文化学院、駒沢大学等にも出講され、その読解力の正確さと博覧強記の点につき、先生に及ぶ者はないとまで高く評価された。尤も周知のごとく、『左氏伝』の中には占筮に關する記述が散見し、『易経』とは關係が深い。従つて「周易繫辭作者に就いて」と題する論文<sup>(13)</sup>を發表されたことは、むしろ当然といわねばならない。なお、繫辭作者とは『周易』の卦辭と爻辭の作者を意味し、『周易』の繫辭伝とは無關係である。

『周易』の卦辭(彖辭)と爻辭(象辭)の作者につき、惇齋は従来より主張された二説を挙げ、それぞれの根拠を明らかにしている。第一説は卦辭・爻辭はいずれも文王の作る所とするもので、その根拠は繫辭伝の「易の興るや、それ中古に於てするか。易を作る者は、それ憂患あるか」と、

「易の興るや、それ殷の末世、周の盛徳に当るか。文王と紂との事に当るか」の記述、および緯書の『周易乾鑿度』、『周易通卦驗』に文王演易の記述があり、さらに司馬遷の「文王囚れて易を演ず」（『史記』太史公自序）の一文を惇斎は明示する。そして、後漢の鄭玄の徒がこの説に依るとし、『左氏伝』昭公二年の『正義』に、「鄭玄云はく、この言に拠りて以て易はこれ文王の作所、断じて知るべし」とあるのに基づく。

第二説は、爻辞の記述を驗するに、多くは文王の後の事であり、升の卦の六四に、「王用て岐山に享す」とあり、隨の卦の上六に「王用て西山に享す」とあり、武王が殷に克つて後、始めて文王を追号して王とした。もし爻辞が文王の制する所ならば、「王用て岐山に享す」と記述するとはありえない。明夷の卦の六五に、「箕子の明夷る、貞しきに利し」とあり、武王が兵を觀した後に、箕子が始めて囚奴となつたので、文王は予め「箕子の明夷る」とは言えない。また、既済の卦の九五に、「東鄰の牛を殺すは、西鄰の禴祭して、実にその福を受くるにしかず」とあり、説く者は皆な西鄰は文王をいい、東鄰は紂をいうとする。しかし、文・武の時は、紂王が依然として南面の天子であ

つたから、文王が自ら己の徳を伐つて福を受け、殷に勝つと言うことはできないと惇斎は論じている。また、君の国に抵抗せんと欲して、遂に東西相鄰すと言うことはできないとされる。

『左伝』昭公二年に、「韓宣子、魯に適き、易象を見て吾れ乃ち周公の徳を知る」とあり、周公は流言の謗を被つたので、また憂患ありとすることができ。故に卦辞は文王の作る所であり、爻辞は周公の作とする。馬融・陸績らは並びにこの説と同じで、今はこれを根拠に用いる。

従来の儒者はこの第二説を取つて疑わず、朱子もまた同一見解であつたが、近世の学者はこれを論議して信じない者も頗る多い。その批判は、大伝（繫辭伝）の記述はみな疑いの辞を用いて断定していないので、卦辞・爻辞の作者およびその作の早晚も知り得ず、大伝が書かれた時ですら不明であるので、まして後世はなおさらであるとし、これはみな漢儒の附会の説であると断じた。

しかし、惇斎はこの批判に対しては、荀子がすでにしばしば『周易』を引用し、これに精通していた者と見做し得るし、その中に「文王、易を演ず」（惇斎はこの一文が何篇にあるか未だ考え得ずとされるが、事実『荀子』に見えない）とあ

り、『左伝』昭公二年の『正義』に、「演はその義を為<sup>つく</sup>りて以てこれを演説するを謂ふ」とあるので、易の経文卦辞は必ず文王の作であり、司馬遷ら漢儒の説は必ず拠る所があったにちがいないとされ、文王が始めて彖辞（卦辞）を繫<sup>か</sup>け、周公が始めて爻辞（象辞）を作り、周代に盛行したので周易と称し、夏・殷の易（連山・歸藏）に対したものであると結論づけた。

そして、百尺竿頭さらに一步を進め、小畜の卦の彖辞に、「密雲あれど雨ふらず、わが西郊よりす」とあるが、文中の「我」は文王が自ら我とし、易を羨<sup>うら</sup>里に演じ、岐周を視て西方としたものであると判断され、さらに小過の卦の六五の象辞（爻辞）に、「密雲あれど雨ふらず。我が西郊よりす」とあるのは、周公が同様の文言を用いたものと見るべきで、これこそ前述の第二説の正当性を補強する傍証であると推論されたのは興味を引く。

惇斎はさらに文言伝<sup>ぶんげん</sup>に關し、正義に莊氏を引いて「文は文飾を謂ひ、乾坤の徳の大なるを以ての故に、特に文飾以て文言と為す」とする見解を批判して、「これ文飾華彩に非ず。当に二卦（乾卦・坤卦）の経文を釈すと謂ふべし。故に文言と称す」と断じている一文に対し、「文は釈なり、

言は旧文を指すなり。旧文の乾坤象象の言を解釈すとなるべし。果して然らば文言とのみ云つて足れり。重複して文言の伝とはいふべからず」とされ、周の文王昌と周公旦との言が彖辞と象辞であり、象・象を述べた伝として、「伝」の字が始めて落着きがあるとされる。かつ、清朝の惠棟が『周易述』の中で「文王の制する所、故にこれを文言といふ。孔子これが伝を為<sup>つく</sup>る」と述べている一文に着目し、自説との冥合を喜ばれた。しかし、惠棟が鄭玄の説を宗とし、卦爻両辞を文王の作とするため、明夷の卦の六五に、箕子をその子荖茲とし、升の卦の六四の王を夏王と見ざるを得ない点で左袒できぬとされ、かつ伝を孔子の作とするのは首肯できぬとされ、是々非々の立場を貫かれている。

また、『論語』子罕篇に「文王既に没す。文茲<sup>ここ</sup>に在らずや」の一文に着目され、「文王の文の地に墜<sup>お</sup>ちずして人の口伝心記に在るもの、その謨訓固<sup>もと</sup>より多しと雖も、自作文章上に顕われたる文は独り彖辞にあらずや」と強調し、また述<sup>しよ</sup>而篇に「吾、復た夢に周公を見ず」の一文を把え、周公の自作文章上に見るべきものは易の爻辞ではないかと論じられる。こうして、孔子の韋編三絶の記述と『論語』述而篇に「我れに数年を仮し、五十以て易を学べば、以て大

過無かるべし」の一文を根拠に、文王周公の繫辭の事実を旁証するに足ると断しても不可ではないとされる。そして最後に王陽明がその門人に答えた「伏羲、易を作り、神農・黃帝・堯・舜、易を用ひ、文王に至つて易を羣里に演じ、周公も又た爻を居東に演ず」の一文を掲げて賛同され、王学の信奉者としての面目躍如たるものがある。

ところで、『惇齋文詩稿』の跋文を認めた先考青洲は、惇齋の文章を通じてその学問思想の特色を明らかにし、「文章は経国の大業、不朽の盛事」<sup>(14)</sup>ともいふべき内容を備え、宋の口与叔が詠じた「文は相如に似て反つて俳に類す」<sup>(15)</sup>とは異なり、また、宋の王秋江が詠じた「文は王勃の如く徒らに軽体」<sup>(16)</sup>とも異なると断じ、惇齋の文章こそ大いに世教に関わる実質を備えると評価した。参考のため書き下し文として全文を次に描げることにする。

予、宋詩を読む毎に、文は相如に似て反つて俳に類す、文は王勃の如く徒らに軽体の二句に至り、未だ嘗て赧然<sup>たんぜん</sup>として耻ぢ、惕然<sup>てき</sup>として懼れずんばあらず。文の難くして詩の易からざるを歎ずればなり。

古より文を能くし詩を善くするの士、名を文苑に擅<sup>はしりま</sup>にし、譽れを藝林に揚<sup>あ</sup>ぐる者、歴代累葉、その人に乏し

からず。しかれども彫虫篆刻、綺語をこれ事とし、麗句をこれ競ふも、一言、道に庶幾<sup>ちか</sup>きを求めんと欲する者は、竟<sup>つひ</sup>に獲べからず。反つて風教に害ありて、人心に益なき者もまた尠<sup>すくな</sup>しと為さず。乃ち知る文や詩や、才の難きに非ずして、徳の難きなり。技の易からざるに非ずして、学の易からざるなり。これを今時に視<sup>くら</sup>ぶれば、更にこれより甚だしき者あり。一世を挙げて道義を重んぜず、文学を貴ばず、その頽敗衰萎せるは、前古、未だ曾て有らざるところなり。彼の称して操觚<sup>そうこ</sup>の士といひ、鉛槧<sup>えんせん</sup>の徒といふ者、その草する所の者を見るに、稗史<sup>はいし</sup>野乗の属に非ずんば、則ち惇徳乱倫の筆、安んぞ経国の大業、不朽の盛事なる者あらんや。終に人の子弟を毒し、世の美俗を傷つけて、名教の罪人と為らざる者は幾<sup>ほとん</sup>ど希<sup>まれ</sup>なり。啻<sup>ただ</sup>に宋詩の貶<sup>へん</sup>する所の如きのみならず。豈に慨するに堪ふべけんや。

二松学舎大学長惇齋那智先生は夙に贅を中洲先師に執り、従遊の久しき、好学の篤き、漢唐の訓詁、宋明の性理は兼修并用し、公を秉<sup>と</sup>つて平を持し、一派に偏せず、一流に倚<sup>よ</sup>らずと雖も、然れども篤く姚江<sup>ようこう</sup>の学を奉じ、簡易直截、実践窮行の旨、己を持するや嚴に、人を待つや

寛・な・り。深・造・自・得、和・易・平・淡、頗・る・古・人・の・風・あ・り。真・に・松・門・の・後・勁・に・し・て・一・代・の・儒・宗・た・り。先・師・の・遺・範、独・り・先・生・に・於・て・こ・れ・を・見・る・と・謂・ふ・べ・し。

今茲<sup>ことし</sup>庚子の歳、齡八十有八に躋<sup>のほ</sup>り、身健に神旺んに、猶ほ能く諄諄として教へ、嚶<sup>び</sup>嚶<sup>び</sup>として導き、翼中<sup>ひと</sup>齊しくその師表を仰ぐ。乃ちその生誕の辰を以て寿宴を九段会館に張るや、銅像を鑄<sup>い</sup>て以て儀容を写し、詩文を刻して以て精神を伝へ、しかしてその不朽を図る。寿像既に立ち、刊集も亦た漸く成るを告ぐ。豈に慶して賀せざるべけんや。

惟<sup>おも</sup>ふに此の集は則ち先生の学問道德の発して詩文と爲る者、真摯の情、嚴肅の意、連篇累章、汪洋洋洋、躍然として楮墨の間に表る。宋詩の歎ずる所の類俳と輕体とは、果して有りや否や。固<sup>もと</sup>より大いに世教<sup>かか</sup>に關はる者あり。嗚呼、この集の重且つ貴き所以なるか。

なお、傍点は筆者が加えたものであるが、一読、惇齋先生の学問思想の特色を端的に表白したものといえよう。この一文に対し、惇齋は、「過褒溢美、敢て当らず。拝読して忸怩<sup>お</sup>措かず。然れども情意の盛んなる、感謝懇激、謹んでこれを奉ぜざるべからず」と述べておられる。

### 三、惇齋の交友

惇齋が記した「南村文鈔<sup>(17)</sup>跋」によると、久保松谷と林南村がおり、惇齋が二松学舎に入学した時、松谷はすでに在学していたが、南村は卒業して、帷を下して徒に授けていたと述懐している。そしてその末尾に「余、二君の知を辱うすること久し。しかして南村の居と相近し、歛然たる莫逆、相益すること洵<sup>まこと</sup>に多し」と記している。松谷（輓次郎）は後に二松学舎教授となった。

先輩の細田剣堂が昭和四年（一九二九）に古稀を迎え、『剣堂先生古稀寿言』を上梓した時、惇齋はその跋文<sup>したた</sup>を認め、「典、先生と相識るは、遠く明治辛卯（明治二十四年、一八九二）に在り、爾来、啓導を受くること殆ど四十年なり。義は朋友と雖も、しかも恩は則ち猶ほ父師のごとし」と述べている。<sup>(18)</sup> 細田剣堂は文武に秀で、書家としても有名であり、三島中洲の信頼も厚く、大東文化学院、奈良女高師、東京女高師の教授を歴任された。

池田蘆洲は細田剣堂より四歳年下であるが、中洲の高弟として等身の著述を残され、『史記補注』はご令息の池田英雄氏により完成され、中国においても令名が高いことは

周知の事実である。蘆洲は惇斎の「月明菅谷翁墓銘」<sup>(19)</sup>の文章に対して、「文字古蒼、殷彝周鼎の色あり、独り照応の巧みなる、伝中の翁の妙訣のみならず」と好意的に評されている。

このほか、二松学舎関係では、安井息軒の外孫で大東文化学院教授であった安井朴堂、漢文作家、ならびに書家として著名であった二松学舎教授佐倉達山、二松学舎専門学校長山田済斎らが、惇斎の文章に評語を加えている。なお、南摩羽峰・信夫恕軒も評語を加えているが、いずれも惇斎の恩師に当たる。

ところで、池田蘆洲が松譽勤続四十年に及んで祝賀されたとき、惇斎は山田済斎の賀詩に次韻して、次のように詠じている。<sup>(20)</sup>

夙立斯心断不遷　　夙に斯の心を立てて断じて遷らず  
績文種徳総堪伝　　文を績し徳を種ゑ総て伝ふるに堪へ

たり

成章有斐誰諉得　　章を成し斐あり誰か諉れ得ん

善誘循循四十年　　善誘循循たり四十年

また、佐倉達山の古稀を寿し、山田済斎の賀詩に次韻して、次のように詠じている。<sup>(21)</sup>

気雄嘗庄俊英場　　気雄に嘗て庄す俊英の場

詞彩今瞻雲漢章　　詞彩今ま瞻る雲漢の章かなるを

楽只若人胡不嘏　　楽只若き人胡ぞ嘏からざらんや

更有寿考与文長　　更に寿考あつて文と与に長し

この詩は『詩経』小雅南山有台の「楽只の君子は万寿疆なけん」を、『論語』憲問篇の「君子なるかな、若き人」とを巧みに組み合せて詠じたものである。

かつて拙宅が大塚窪町にあった頃、達山の家の近くであった。先考が満洲へ赴いた留守の時、威風堂々として長い白髯を蓄え、杖をつかれ、風貌は仙人のような先生が尋ねて来られ、書斎を見せてほしいと言われてご案内したことが脳裏に焼きついている。当時、私は中学三年生であった。漢文作家として著名であった先生には『達山文稿』・『談藪』の著書がある。

このほか、特に数十年の親交があった加藤天淵につき、惇斎は『天淵文鈔』の序文<sup>(22)</sup>を草し、「天淵加藤先生は親交を辱うすること数十年、久しうして益々畏敬し、真に君子人たることを知る」と述べている。旧制武蔵高校・大東文化学院・東洋大学教授を歴任され、東洋大学長となられ、『周礼』の校勘により文学博士となられた。惇斎はこの序

文の中で天測を次のように高く評価している。

雅健深粹、皆な体験自得の余に出で、一語も浮誇に涉るなし、后宮に上る書より、恩師に報ゆると児孫に名づくるとの諸篇に至るまで、精誠懇惻を尽し、読む者をして感歎措かざらしむ。嗚呼、此れ名教を扶植するの文字にして、以て世に垂れて遠きに行ふべく、駿嶽とその崔巍瑩潔を比する者か非か。輓近、文を以て家に名づくる者、多からずと為さざるも、その著作する所は華麗綺縟、心を驚かし目を奪ふの巧あり。然れども生平の行実を以てこれを考ふれば、背馳齟齬し、大いに径庭あり。竟に繁文虚飾の辞たるを免れず。謂はゆる世教に関はるに足らず。工なりと雖も益なき者、これを先生の文章の素履と一致するものに視ぶれば、日を同じうして語るべからざるなり。

以上の記述により、惇斎と天測の親交の深さを十分に理解し得る。

昭和十七年七月、国分漸庵が八秩の寿を迎えた時、惇斎は次の七律の賀詩を呈した。<sup>(23)</sup>

寿考康寧九九年 寿考 康寧 九九の年  
澡身純潔氣怡然 澡身 純潔 氣は怡然たり

司刑洽及祥刑術

刑を司り 洽く及ぶ 祥刑の術

董学歆輸光学錢

学を董し 歆び輸す 光学の錢

詞發風霜寬且栗

詞は風霜に発して 寬且つ栗

書飛烟霧断還連

書は烟霧を飛ばして 断還た連

朱顏綠鬢如強壯

朱顏 綠鬢 強壯の如く

景福頌来成短篇

景福 頌し来って 短篇と成る

漸庵は農商務大臣となつた山本二峰とともに松門の出世頭であり、朝鮮の検事総長を経て錦鶏間伺候となり、後に二松学舎理事長となつた。頌聯はその事実を巧みに表白され、頌聯は格調の高い詩を賦し、独特の書風を誇る漸庵を詠じたものである。ご令室は日本画に巧みで、漸庵がその画賛を認めているが、私の家にも残っており、表装して保存している。

また、二松学舎専門学校長山田済斎との親交も長く、「山田済斎先輩の七十を寿す<sup>(24)</sup>」と題する次の詩は友情が秘められている。

紹述師風又祖徽 師風を紹述して 又た徽を祖とす  
声隆德邵百禔帰 声隆く 德邵く 百禔帰す  
応躋仁寿期頤域 応に躋るべし 仁寿期頤の域  
七十於君曷足稀 七十 君に於て 曷ぞ稀とするに足らん

山田方谷の義孫となって中洲の跡を継いだ済斎に対し、  
仁寿ともいふべき期頤（百歳の人をいう）の域に躋るにちが  
いないと詠じている。そして、昭和十八年五月、高梁に帰  
隠された済斎が『山田方谷全集』を上梓されたとき、次の  
賀詩を呈している。<sup>(25)</sup>

能繩祖武氣逾平 能く祖武を繩ぎ 氣逾々平かなり  
刻苦編修刊刻成 刻苦 編修し 刊刻成る  
天上英靈定欣慰 天上の英靈 定めて欣慰せん  
人間誰不感精誠 人間 誰か精誠に感ぜざらん

祖武は祖先が行った功績・事業をいい、『詩経』大雅・  
下武に「昭かなる茲、来り許んで、その祖武を繩ぐ」とあ  
る。その後、昭和二十七年十一月二十一日、済斎の訃に接  
し、「山田済斎を哭す」と題する次の七律を詠じている。<sup>(26)</sup>

八旬余歲積功来 八旬余歲 功を積み来り  
純粹和平心自恢 純粹 和平 心自ら恢なり  
造士館中成秀士 造士館中 秀士を成し  
二松鬢裡育英才 二松鬢裡 英才を育す  
余姚精義師伝見 余姚の精義 師伝見はれ  
方谷全書祖業堆 方谷の全書 祖業堆し  
湓接訃音吾喪我 湓として訃音に接し 吾れ我を喪ふ

高風永隔不勝哀 高風 永く隔て 哀しみに勝へず  
なお、先考青洲も親交を辱うし、昭和十三年十月、満洲  
政庁に赴任した時、「濱青洲の任に満洲朝に赴くを送る」  
と題する次の七絶を詠じている。<sup>(27)</sup>

師門攻学有淵源 師門 学を攻め 淵源あり  
应聘一朝趨帝闈 聘に応じ 一朝 帝闈に趨く  
志得身通千里外 志得て 身は通ず 千里の外  
斯文独思与誰論 斯文 独り思ふ 誰と与にか論ぜん

昭和二十二年七月、志半ばにして満洲から信州松本の郷  
里に帰還した先考が、惇斎に呈した新年の詩に次韻され、  
次の七絶を詠じている。<sup>(28)</sup>

緑竹疎梅帶紫煙 緑竹 疎梅 紫煙を帯び  
春風吹遍動韶年 春風 吹き遍く 韶年動く  
誰人更始斯文教 誰人か更始す 斯文の教へ  
穀旦翹望北信天 穀旦 翹望す 北信の天

かつて東京大学医学部教授であった竹内松次郎博士が、  
偶々、松本医学専門学校長となっておられたため、先考は旧  
交を温め、東洋哲学を講ずることとなった。「医は仁術」をモ  
ットーとされ、東洋哲学に造詣が深い博士の好意に基づく  
ものであった。したがって惇斎の期待に添うことができた



かった。

因みに、竹内博士は練馬区中村橋の邸宅に十本の松があったので十松と号し、かつて毎年、園遊会が庭園で開かれ、山田清斎、池田蘆洲・佐倉達山らも招待され、蘆洲先生の七絶の結句に「二松の友は会す十松堂」とある。

### おわりに

惇斎先生が先考に宛てた書翰は、すべて那智佐典と記されているが、二松学舎関係の記録はすべて佐伝となっている。また、『二松学舎九十年史』<sup>(29)</sup>には、「名は敬典、字は天叙、通称佐伝、また佐典」とある。そして千葉県府馬の惇斎の墓地にある加藤天淵撰「惇斎那智先生報恩碑」に記された冒頭の記述<sup>(30)</sup>も同様である。

ところが、『二松学舎百年史』の那智佐伝舎長・名誉学長の記述の中では、括弧を施し、「本来、佐典と命名したが、戸籍上のあやまりのため佐伝となってしまう<sup>(31)</sup>」と記されている。この点につき、故那智安敬氏の未亡人栄美子様にご確認を依頼したところ、戸籍には「那智佐伝」となっており、親戚の方の話によると「さでん」と呼ばれた由である。ただ疑問であるのは、「名は敬典」という記述で

ある。これが本名のごとく記されているが、事実、惇斎先生の先考の諱<sup>いみな</sup>は「正敬」であり、那智家の方は「敬」の字を名に付されている。また、「佐伝」が戸籍登載の名であれば、これを通称というのも疑問である。とにかく、前述のごとく、戸籍の本名が佐伝ゆえ、公的な二松学舎関係の名は佐伝とされ、先生ご自身は常に佐典の名を用いられていたのが事実のようである。

なお、十数年前に明德出版社長小林日出夫氏より、那智安敬氏と共著で、張之洞撰『勸学篇』の執筆を依頼されたが、不幸にも那智安敬氏が若くして急逝され、この計画は中断していたが、今回、未亡人より『勸学篇』の遺稿が送付されたので、近い将来にまとめて上梓する予定である。これも不思議な因縁と言わざるを得ない。

今回、私は執筆を依頼され、『惇斎文詩稿』を中心に先生の漢詩文の解説に全精力を尽し、とにかく先生の人となりと学問思想の特色につき、論文にふさわしい内容とすべく努力した。これにより、かつて先生に保証人となって戴いたご恩返しが果たせたのではないかと思う次第である。

〔注〕

- (1) 那智佐伝 『惇斎文詩稿』 九七—一〇二頁 惇斎那智佐  
伝先生米寿祝賀記念会 昭和三十六年。
- (2) 那智佐伝 前掲書 七三—四頁。
- (3) 那智佐典 回憶四則『二松学舎六十年史要』二五六—七頁  
二松学舎 昭和十二年。
- (4) 那智佐伝『惇斎文詩稿』四八—九頁。
- (5) 那智佐典 回憶四則
- (6) 那智惇斎「就任の辞」『二松学舎九十年史』三七二—四頁  
二松学舎 昭和四十二年。
- (7) 那智佐伝 前掲書 二二—三頁。
- (8) 那智佐伝 前掲書 二五—六頁。
- (9) 王陽明『伝習録』巻の下 三九頁 漢文大系本 富山房  
昭和五十一年。
- (10) 大塩中斎『洗心洞割記』岩波文庫本 山田準訳註 一一一  
頁 昭和十五年。
- (11) 濱 久雄「王陽明補遺詩三八首考」——その制作年代と評  
価について——『大東文化大学漢学会誌』第三十号 平成  
三年。
- (12) 那智惇斎 前掲書 三六—八頁。
- (13) 那智惇斎「周易繫辭作者に就いて」『二松学舎大学創立八  
十周年記念論集』二松学舎大学 昭和三十二年。
- (14) 曹丕『典論』の論文 『文選』第五二卷所収。曹丕は三国  
魏の文帝。
- (15) (16) 于濟・蔡正孫編『唐宋聯珠詩格』起聯人事対格 安政  
三年。
- (17) 那智惇斎 前掲書 一一〇頁。
- (18) 那智惇斎 前掲書 一〇九頁。
- (19) 那智惇斎 前掲書 七九頁。
- (20) 那智惇斎 前掲書 一五二頁。
- (21) 那智惇斎 前掲書 一五三頁。
- (22) 那智惇斎 前掲書 六一頁。
- (23) 那智惇斎 前掲書 一七〇頁。
- (24) 那智惇斎 前掲書 一五九—六〇頁。
- (25) 那智惇斎 前掲書 二三二頁。
- (26) 那智惇斎 前掲書 二三八頁。
- (27) 那智惇斎 前掲書 一六五頁。
- (28) 那智惇斎 前掲書 一九九頁。
- (29) 『二松学舎九十年史』三七二頁。
- (30) 『二松学舎百年史』八八—二三頁。
- (31) 前掲書 八七二頁。

(二〇〇四年十二月十七日稿)

(財団法人無窮会専門図書館長)